

日本海に面する人口約2千7百人の町・瀬棚町は、1990年代初めまで老人医療費全国ワースト1の町でした。しかし、'91年に約143万円だった老人医療費が'02年には約73万円と半減。さまざまな予防医療に積極的に取り組み、道内外から注目されています。

地域医療はどうあるべきか。プライマリ・ケアに求められる役割はどのようなものか。それを実践する瀬棚町の取り組み取材しました。

まちを変えた予防医療

～瀬棚町の地域医療～

町民の願いを実現

瀬棚町は日本初の女医・荻野吟子が1897年に医院を開業したまちです。また、日本海からまちに吹く強い風をエネルギーに変えようと、日本初の洋上風車「風海鳥」の建設や、安心・安全の有機農業の実践など、21世紀にふさわしい環境に配慮したさまざまな取り組みが進められています。

瀬棚町では、1996年に町内に1軒しかなかった開業医が入院施設を廃止することになり、町にとって大きな問題となりました。この年、町では住民を対象に住民意識アンケートを行い、医療や介護の状況などを幅広く把握することに努めました。その結果、回答者の7割が24時間対応できる入院施設の設置を望んでいることが分かりました。

現在、3期目を務める平田泰雄町長は、役場職員時代に保健福祉部門を経験していたこともあり、住民の要望を何とかかなえようと動き始めます。医師確

保のために奔走していた平田町長がある医療関係者から紹介されたのが、現在瀬棚町国民健康保険医科診療所長を務める村上智彦医師でした。'99年のことです。

村上所長は、自治医科大学に入学し、厚岸町で10年間勤務経験のある五十嵐正紘教授に出会います。五十嵐教授が地域医療に熱心だったことから、村上所長もプライマリ・ケア医を目指して道内外で研修を積んできました。また、村上所長は歌登町出身で、小さなころから地方における医師確保の難しさを知っていたことから、いつかは北海道で勤務したいと考えていました。

平田町長は、保健・医療・福祉を中心としたまちづくりのほか、有機農法による安全な食品づくり、環境に配慮した風力発電の導入など、21世紀を見据えたビジョンを描いており、こうした思いに共感する部分があったことから、村上所長は瀬棚町での勤務を決めました。



医療センターそばにある荻野吟子の顕彰碑。

※1 老人医療費

70歳以上の者及び65歳以上70歳未満で何らかの障害を抱えており、市町村長によりその障害を認定された者に対してかかる医療費のこと。なお、年齢は'02年10月から5年間かけて、段階的に70歳から75歳に引き上げられている。

※2 コメディカル

医師に協力する看護師、薬剤師、検査技師などの専門家のこと。

町内には、昔、国縫～瀬棚を結ぶ国鉄瀬棚線が敷かれており、瀬棚が終着駅であったことから鉄道関連の施設がありました。町では、その跡地を有効活用しようと、'95年ごろから旧国鉄跡地一帯を福祉ゾーンとして整備していくことを検討していました。その核となる施設が、荻野吟子記念瀬棚町医療センターです。現在村上所長が勤務する医科診療所のほか、歯科診療所、訪問介護ステーション、デイケアルームなどがある施設で、町の保健福祉課の職員が常駐する保健センターも併設しています。また、すぐそばには公営温泉やデイサービスセンター、在宅介護支援センターや福祉センターがある総合福祉センター「やすらぎ館」も整備され、医療センターを核に、地域の保健・医療・福祉の拠点となっています。

瀬棚町での勤務を決めた村上所長は、センター建設前の構想段階から参画し、所長室を設けるよりもリハビリ訓練をできる空間を確保してほしいなど、センターの建設についてさまざまな要望を伝えてきました。それは住民意識アンケートをよく理解した上でのことです。

「7割の住民がベッドのある医療機関がほしいという希望を出されていましたから、住民が望んでいることをかなえたいと思いました。また、こちらに来る前からここで講演をやる機会があったので、住民の生きがいについてアンケートをとって見たところ、高齢者の約8割が町の中で何らかの役割を持っていることが分かりました。役割を持っていることが健康を維持すること、病気を予防することにつながるのです」と村上所長。また、併せて平田町長に対しても「『私は

素人だといって、地域医療の問題にさじを投げないでください。行政も議会も一緒に協力してほしい』ということ、そして『^{※2}コメディカルのスタッフをきちんと確保してほしい』など、いろいろな条件を出しました」といいます。

そのかいあって、現在診療所には、村上所長を含めて医師3名のほか、非常勤の眼科医1名、看護師10名、薬剤師1名、診療放射線技師・理学療法士・作業療法士が各1名と、医師を支えるスタッフがそろっています。

「医師が何でもできると勘違いしているかもしれませんが、地域医療ではそれよりもリハビリの理学療法士や作業療法士、薬剤師、放射線技師、栄養士や保健師など、医師を支えるスタッフが重要です。医者は病気を見つけるプロですが、住民の健康を維持するためには専門のスタッフの力が必要なのです」と村上所長はいいます。

地域医療を担う医師の役割

米医学誌の『ニューイングランド・ジャーナル・オブ・メディスン』に発表されたある論文には、住民が1,000人いるまちで、病院で受診した人は250人、入院したのは5、6人、専門的な治療を必要として大学病院などに行く必要があったのはわずかに1人だったといえます。病院を中心に考えると、残った750人に対するケアには力点が置かれません。しかし、地域医療として考えると、健康な人たちに対する検診、予防があってこそ病院なのです。「医師法第1条には『医師は、医療及び保健指導を掌ることによって公衆衛生の向



医療センターがある福祉ゾーン一帯の施設は「瀬棚町ふれあい・すこやかコミュニティー施設」と名付けられており、敷地内には旧国鉄跡地を活用したことから国鉄の名残も。



荻野吟子記念瀬棚町医療センター。



医師が3人体制となったことで、代診業務にも積極的に出かけているという村上所長。

上及び増進に寄与し、もって国民の健康な生活を確保する』とあります。医療と公衆衛生の向上は並列なのです。ですから、当たり前のことを普通にやろうと考えているのです」と村上所長。

そこで、積極的に取り組んでいるのが予防医療です。中でも道内外で話題となったのが、肺炎球菌ワクチンの予防接種と公費補助の取り組みです。高齢者がインフルエンザにかかるると4人に1人の割合で肺炎が進み、死亡に至るケースが少なくありません。そこで、最も頻度の高い肺炎球菌性肺炎のワクチン接種に乗り出したのです。肺炎になれば治療に一人約25万円がかかるそうですが、100人のうち1人の予防ができれば採算が合うとして、5,530円の接種料のうち2,030円を町が負担。'01年に瀬棚町で始めた取り組みが今では全国に広がり、多くの市町村で肺炎球菌ワクチンの公費補助が実現されています。

「本州では、北海道は医師確保が大変だから給料が高くて、質の悪い医療をやっていると思われています。北海道出身者として、これは許せません。そんなイメージを変えていきたいのです。行政では、条例がない、前例がない、予算がないと三つの言い訳があるとある本で読んだことがあります。逆にいうと条例を作って、前例をつくって、予算を確保すればいいわけです。いい前例を作れば、周りも真似してくれます。地味な取り組みかもしれませんが、そうやっていけば、住民の健康を守っていく方策がいろいろ広がっていくと信じています」と村上所長は、肺炎球菌ワクチンの公費補助を実現させた思いを語ります。

保健・医療・福祉と教育で老人医療費が半減

診療所では、保健推進事業として、保健師らと一緒に年に30回ほど各地区で住民向けに「健康講和」を開催しています。病気にならないためのいろいろな知識を学んでもらおうという取り組みです。そのほか

にも健康づくり教室として、「風海鳥^{かざみどり}」をもじった「ほそみどり」を開催。これは、保健師が週1回、2地区で筋力を保つストレッチと若者向けのダイエット体操を半年間指導するというもの。今年はこれに続いて、「やすみどり」を企画。禁煙ならぬ卒煙をサポートするもので、受診のほか煙草をやめるための治療薬（ニコチンパッチ）を町民に半額公費負担してくれるというものです。薬剤師が中心となって月に1回、ヘルパーやデイサービス職員など広く他施設の職員と学ぶ「オープン勉強会」も開催するなど、幅広い活動を行い、病気にかかっている人だけでなく、健康であり続けるための保健・医療・福祉を連携させた地域医療を実践しています。

「脳卒中や心筋梗塞など重大な病気も元をたどれば、高血圧症や高脂血症、糖尿病などの生活習慣病が引き起こすものです。生活習慣は生活そのものですから、早い段階で予防をすれば、医療費だってかかりません。知識と忍耐があれば、だれでも生活を改善できるはず。その情報を提供するのがわれわれ医療従事者なんです。

住民は高度な医療を求めているのではなく、良い医療を求めているのだと思います。でも、分からなければ高度な医療にすがるしかありません。地元の良い医者がいて、良い医療があって、しっかり対応しているという保証があれば、わざわざ都会に足を運ばないでしょう」。

瀬棚町の診療所では、医師だけでなく、看護師、薬剤師などスタッフ全員が、住民が満足できる地域医療を実現しようと、患者への対応はもちろん、病気を引き起こさないためのさまざまな取り組みを行っているのです。診療所の朝の打合せには保健師が同席、患者や在宅介護者などの情報を共有し、医療と保健・福祉の連携がしっかり図られています。

「地域医療に必要なのは、プライマリ・ケアですが、

※3 肺炎球菌ワクチン

肺炎球菌によって引き起こされるいろいろな病気（感染症）を予防するためのワクチン。肺炎の原因となる微生物には各種細菌やウイルスなど、たくさんの種類があるが、肺炎球菌は其中で最も重要な位置を占めている細菌。肺炎球菌ワクチンは、1回の接種でいろいろな型に効くように作られている。

別にプライマリ・ケア医でなくても、それを理解する医師がいればいいのです。自分でできなくても、メディカルや行政など、一緒にできる人たちがいれば必ず実現できるはずです」と村上所長。そして、保健・医療・福祉に加えて「教育」の重要性を強調します。

地域包括ケアを実践する岩手県藤沢町（地域事例3参照）で1年間勤務した経験のある村上所長ですが、瀬棚町に赴任した当初は、なかなか住民の理解を得られないこともあったそうです。例えば、EBM（科学的な根拠に基づいた医療）を重視し、薬剤師の資格も持つ村上所長は、無駄な薬は一切患者さんに出していませんでした。それまで多くの薬をもらっていた患者さんにしてみると、薬があることで安心することもあります。しかし、それよりも村上所長は体に免疫をつけ、病に打ち勝つ体を作ることをまず優先させているのです。

「高齢者の方は、湿布がほしいとか、今まで使っていた薬がほしいとか、いろいろな要望をいってきます。でも、税金を払っているから何でも権利だと思っではいけません。私はよく義務と権利というのですが、住民には自分の体は自分で守る義務があるのです。結局、そのツケは息子や孫に回ってきます。社会保障システムだって、相互扶助で成り立っているのですから、そこをみんなが自覚していかなければ破たんします。このことをだれかがいわないとはいけません。それも私の仕事だと思って、住民に理解を得るように努力したのです」。

さまざまな取り組みが功を奏し、瀬棚町の老人医療費は半減したのです。

住民が望むサービスを

瀬棚町では、医療センターを核に、在宅療養患者への訪問医療のほか、介護を必要としない体づくりを目指すために医療センター2階にはリハビリ室があり、理学療法士、作業療法士も常勤しています。

「高齢になっても元気で仕事ができ、幸せに暮らしているのであれば、それを見て移り住む若い人がいるかもしれません。高齢者ばかりだからとマイナスに考えず、発想を転換すればいいのです」。

所長室を設けずにリハビリ室を整備した背景には、いつまでも住民が元気で仕事を続け、病気や寝たきりにならないようにケアしていこうという思いがあるのです。

さまざまな取り組みを進める中で、村上所長が気配りするのは「住民の声」です。

「医療過疎の地でどうすればいいのかとよく聞かれますが、第一は住民が望むことです。住民が声を上げない限り、絶対実現しません。これまでも北海道でしっかり地域医療をやっていこうと考えていた医師はいたはずですが、それを支援し、継続させていくのは住民の問題です」。

瀬棚町の診療所は、ホームページも充実しています。サイト内には「苦情受付」コーナーがあり、苦情に対して親切な解説が掲載されています。また、「掲示板」には、外部からの声ばかりでなく、診療所のスタッフが町内で流行しそうなインフルエンザの注意を呼びかけたり、インターネットを利用しない高齢者のために、こうした情報を伝えてくださいといったコメントを添えるなど、情報発信にも工夫が見られます。忙しい合間を縫っての書き込みを見ていると、本当に地域のことを考え、地域住民の声を聞きながら医療に携わっているという熱い思いが伝わってきます。

こうした医療従事者の思いを受け止め、それに応



診療所の受付。

えていくことが住民の義務ではないかと強く感じます。

これからの北海道の地域医療

「北海道には小さな自治体がたくさんあります。へき地もあります。そんな北海道でなぜ地域医療のモデルになるまちがなかったのでしょうか。地域に根差した医療のニーズもあるのに、なぜノウハウを作らなかったのでしょうか。ようやく最近、地域医療や総合医療ということに目が向き始めて、北大にも札幌医大にもそうした講座ができています。地域医療に目を向けて、人を育てていくシステムがようやく北海道でも出てきました。お金もなく、人もいなければ、智慧を出す。そうすれば何かできるはずです。でも、まずは住民がビジョンを持った首長を選ばなければ駄目です。よく首長さんは『医療は素人だから』といいますが、国民健康保険の保険者は市町村で、責任者は首長です。医療の勉強はしていても医者は行政のことは分かりません。ビジョンがない首長では、結局、医者独りよがり地域医療が行われ、サポートがなければ、そのうちに辞めてしまいます。今まではその繰り返しでした。でも、もう繰り返してはいけません」。

瀬棚町は、この9月1日から、大成町、北檜山町と合併し、せたな町となります。

「合併しても、私は住民の選択に従おうと思っています。住民が選ぶ新しい首長と全く考え方が合わなければ、ここを去ることだってあり得ます。すべては住民の選択です」。

瀬棚町がこれまで築き上げた地域医療の仕組みをせたな町に引き継いでいくのは、住民の選択にかかっているのです。

瀬棚町では、'80年代から港を核にした瀬棚町マリン・タウン・プロジェクトが推進されてきました。プロジェクト当初は時代背景もあり、ハード型のプロジェクトでしたが、現在はそれを継承しつつ、環境に配慮

した21世紀型のまちづくりに転換しています。'03年には国内初の洋上風車が完成、また、有機農業特区における株式会社の農業経営もあり、町の基幹産業である農林水産業から発生する家畜排せつ物、水産加工残さなどを活用したバイオガス発電を行い、地域のハウス栽培に利用する取り組みを進めています。将来的には、バイオマス利用を教育や観光資源として生かすことも目指しています。「農業体験など、都市との交流事業も進めていければ」と、新しいまちづくりに着手した平田町長はいいます。

「診療所を作る際には、老人医療費が一番高いまちで何を考えているのかと猛反対されましたが、何とかここまで実現することができました。村上先生は、当初いろいろ条件を出されたので、面食らいました（笑）が、今ではすっかり地域医療が定着しています」。

市町村合併に当たって、現在の病院・診療所はそのまま新しい町に引き継ぐこととし、病院の運営方法は必要な時期に見直すということになりました」。

道内外からも注目を集めた瀬棚町の地域医療。小さな町だからできることかもしれませんが、ようやくモデルとなる取り組みが北海道にも出現したのです。瀬棚町での経験を、これからの北海道の地域医療に生かしていくためにも、新しいせたな町に引き継ぎ、さらに発展させていってほしいものです。



町内に入院施設がなかった時には八雲町や函館に出かけて行くなど大変な地域だったと振り返る平田町長。